

春寒

大窪詩仏

寒食今より幾日も無し

梅花は零落し杏花は開く

春寒雪を醸せども力足らず

却て黄昏向て雨と成て来る

【作者】大窪詩仏(一七六七〜一八三七年)(明和四年〜天保八年)、江戸時代後期の漢詩人である。書画も能くした。常陸国久慈郡袋田村(現茨城県久慈郡大子町)に生まれる。名は行(こう)、字は天民(てんみん)、通称を柳太郎、のちに行光、号は詩仏のほかは柳侘(りゅうたく)、瘦梅(そふい)、江山翁(こうせんおう)、玉地樵者、艇棲主、含雪、縁雨亭主、柳庵、婁庵、詩聖堂(しせいどう)、江山書屋(こうせんしょや)、既醉亭(きすいてい)、瘦梅庵(そふいあん)とも号した。号の詩仏は唐詩人杜甫が「詩名仏」と称されたことによるものか、あるいは清の袁枚の号に因むと言われる。

【語釈】*春寒…春になつても残る寒さ。 *寒食…中国で、冬至の後一〇五日目の日は、風雨が激しいとして、火の使用を

禁じて冷食した古俗(こぞく)。*零落…草木の葉が枯れ落ちること。落ちぶれること。死ぬこと。 *杏花…あんずの花

*黄昏…夕暮れ。 たそがれ。